

ロシア＝クリミヤ汗国同盟と大オルダ

中 村 仁 志

はじめに

13世紀にはじまったキプチャク汗国によるロシア支配は、「タタールのくびき」と呼ばれ、ロシアの歴史に大きな刻印を残した。これに終止符を打った出来事とされるのが、「ウグラの対陣」である。1480年、汗権力から自立する姿勢を見せるモスクワ大公イヴァン3世を膺懲すべく大オルダ¹⁾の汗アフメト（アフマート）が軍をおこした。モスクワの南方にあるウグラ川に達したアフメト指揮下のタタール軍は、川をはさんでイヴァン3世のロシア軍と数週間にわたって対峙をつづけ、最終的にアフメトが兵を引いて退去したというのが、そのてんまつである²⁾。

タタール勢力の筆頭であり、キプチャク汗の事実上の後継者とみなされていた大オルダの汗が、自分の威令に服そうとしないロシアの君主を實力で従わせようとしてはたせなかった、この「ウグラの対陣」をもって、モンゴルによるロシア支配＝「タタールのくびき」は終了したとされる³⁾。さらに、ウグラ河畔からの撤退後ほどなく81年初めにアフメトが東方のタタール勢力の急襲を受けて横死したこともあり、それ以降ロシアは南方の遊牧勢力による支配におびえることはなくなるとされる。

アフメト汗の歴史の舞台からの突然の退場によって、たしかに大オルダは、はかりしれないほど大きなダメージを負った。とはいえ、この凶事そのまま大オルダの消滅につながったわけではない。アフメトの没後、その衣鉢を継ぐべく彼の遺児たちがあいついで汗位にのぼった。彼らのもとで大オルダは、ヴォルガ川下流域を中心とする強大なタタール勢力としての実をたもちつづけ

た。ロシアおよびその同盟者であったクリミヤ汗国⁴⁾にとって、大オルダは依然として危険な敵手であったのである。

状況に転機が訪れるのは、1502年になってのことである。この年、クリミヤ汗国のメングリ=ギレイ汗は大オルダのシェイフ=アフマド汗を撃破、さらに都のサライを寇掠して、大オルダを敗亡の淵に追い込んだ⁵⁾。この惨事によって大オルダは強大な遊牧勢力としての実を失い、その汗家のメンバーたちは、ちりぢりとなった。そのなかのあるものはロシアを含めた周辺勢力のもとに身を寄せるようになる。

その一方、大オルダに勝利したクリミヤ汗国は、黒海からカスピ海の北岸にかけてひろがる草原地域で遊牧生活をいとなむタタール人の諸勢力中の最強の地位についた。その後、クリミヤ汗国は、オスマン帝国を後ろ盾にして、18世紀にいたるまでロシアを脅かす存在となるであろう。

以上のように1481年のアフメトの急死から1502年のメングリ=ギレイの大オルダに対する勝利までは、タタール人世界における一大転機にあたっていた。ヴォルガ川流域のサライに坐するキプチャク汗（さらにその後継としての大オルダの汗）を頂点とするキプチャク汗国の伝統的な秩序の体系からクリミヤ汗を中心とする構図への転換であった。そして、それはまたロシアと、その南方の草原世界との関係にも大きな変化をもたらさざるをえなかった。

本稿では、この約20年におよぶ転換期に焦点を当て、同盟関係にあったロシア、クリミヤ汗国と大オルダとの対決を軸に、諸勢力がからみあう国際関係の推移をあとづけていきたい。

1

1480年の「ウグラの対陣」においてイヴァン3世のロシアとアフメト汗の大オルダが対峙した時、クリミヤ汗国はロシアを、リトアニアは大オルダをそれぞれ支援すべく動いた。1470年代に成立していたロシア=クリミヤ同盟と大オルダ=リトアニア同盟の対決の構図にしたがっての行動である。ウグラ川の対

岸に陣をはってタタール軍の前進を阻もうとするロシア軍を前にしたアフメトとしては、リトアニアからの援軍が到着するのをまって渡河をはかろうとしたのであるが、期待のリトアニア軍は、ロシアと結んでいたクリミヤにけん制され、結局、戦場に参着せずにおわる。

ロシアとクリミヤ汗国の連携を前に撤退をよぎなくされたアフメトは、おもいもよらぬ方向からの一撃を受ける。盟友関係にあるとみなしていた東方勢力であるチュメニの汗イバクやマンギート族（ノガイ）⁶⁾の首長ムーサ、ヤムグルチらの急襲を受けて81年初めに殺害されたのである。

事変は、ロシア、クリミヤ汗国、リトアニア、大オルダなどがおりなす勢力関係の図式に大きな波紋を生じさせることとなった。諸国のなかでもっとも憂慮すべき状況となったのは、当然のことながら、予期もしないなかで突然発生した汗権力の空白という非常事態におちいった大オルダである。もともと敵対していた北方のロシアと西方のクリミヤ汗国に加えて、あらたな脅威となった東方のイバクら。このように周囲を敵に囲繞された、四面楚歌といえる状態が、アフメトが死亡した時点で、彼の継承者となるはずの遺児たちがおかれた立場であった。

アフメトは3人の妃とのあいだに10人の息子をもうけた⁷⁾。彼らのなかで、アフメト亡き後の大オルダの部衆を導いていくうえでとくに重要な役割をはたすことになるのが、それぞれ母親のちがうムルタザ、サイイド＝アフマド（サイイド＝マフムード）、シェイフ＝アフマドの3人であった。

これら遺児たちとならんで、大オルダにとって重要であったのが、ベクリヤリベクの動向である。ベクリヤリベクは、キプチャク汗国のながれをくむ遊牧集団においては汗につぐ立場の顯職で、政務・軍務のかなめとなる地位であった⁸⁾。アフメト汗のもとでベクリヤリベクをつとめていたマンギート族のティムールが、汗の横死という危急存亡の時に臨んでどのような選択をするかが、大オルダのその後の命運を左右することとなった。

このときティムールが選んだのは、アフメトの年長の息子のムルタザ、サイ

イド=アフマドなどをともなってクリミヤ汗国のメングリ=ギレイのもとにむかうという行動であった。メングリ=ギレイはロシアの同盟者であり、また彼本人もアフメトとは不倶戴天というべき敵対関係にあった。ここからすると、アフメトの縁者たちにとってはけっして好意的な対応を期待できる相手ではない。とはいえ、イバクラによるアフメト殺害後の、自分たちの命もあやうい窮地に立たされていたティムールやアフメトの息子たちにすれば、死中に活を求めざるをえず、あえてクリミヤ汗のふところに飛び込んだのである。

これに対し、メングリ=ギレイは、彼らをクリミヤの宮廷に受け入れ避難所を提供した。大オルダの汗位をもうかがい得る皇子たちを奇貨として身近にとどめおこうとしたのである⁹⁾。

一方、大オルダでは、1481年ないし82年に、ムルタザらの弟のシェイフ=アフマドが、部衆らによってあらたな汗として擁立された¹⁰⁾。アフメト没後の汗不在という不安定な状態がつづけば、勢力拡大をもくろむ周辺諸国のえじき、かっこうの草刈り場になりかねないのを危惧し、とりあえずは新汗のもとで体制を整えようとしたということであろう。

かくして草原地帯では、アフメトの後継者となりうる有力な候補であった年長の息子たちが大オルダとクリミヤ汗国に分かれて、将来の雄飛にそなえることとなった。

遊牧民社会にあっては、父汗の死後、残された息子たちのあいだで後継の座をめぐる争いが起こるのはしばしば見られた現象である。その際、息子たちが複数の国に分かれていると、状況はさらに錯綜としてくる。たとえば、クリミヤ汗国のメングリ=ギレイとその兄弟である。メングリ=ギレイの父でクリミヤ汗国の創設者であったハジー=ギレイが1466年に死亡した後、クリミヤではメングリ=ギレイと兄のヌル=デウレットのあいだで長きにわたる汗位争いがもちあがった。この争いは、オスマン朝の支援を得たメングリ=ギレイが汗位を確保するというかたちで一応の決着を見るが、一度はクリミヤ汗の地位にあった兄ヌル=デウレットはその後も、メングリ=ギレイの汗の座をあやうく

させかねない潜在的脅威でありつづけた。

クリミヤを去ってリトアニアに移ったヌル=デウレットは、その後ロシアに迎えられる¹¹⁾。この当時、ロシアの支配者であったモスクワ大公イヴァン3世は、父のヴァシーリー2世以来のタタール政策をひきつぎ、ロシアに仕えるようになったタタール勢力の積極的な利用をはかっていた。とりわけ、タタール国家の汗家の出身者は、対タタール外交における貴重なコマであった。

たとえば、ロシアの対カザン汗国政策である。1479年に死去したカザンの汗イブラヒムは2人の妃とのあいだにもうけた5人の息子を残した。このなかで最初の妃の子であったアリー（アレガム）がカザンの汗位を継いだ一方、2番目の妃ヌルサルタン¹²⁾が産んだムハメッド=エミンはロシアにやられカシーラの地に扶持を得た。以後イヴァン3世は、80年代になると数度にわたってカザン遠征をもよおした末、後述のように1487年にムハメッド=エミンをカザンの汗位につけることに成功する。

ここからもうかがえるように、かつてクリミヤ汗の座にあったヌル=デウレットの存在は、イヴァン3世の対クリミヤ外交における切り札、メングリ=ギレイに対する無言の圧力の材料となった。もしメングリ=ギレイがロシアとの同盟から離れて他の勢力、それもロシアと敵対する勢力と結ぼうとしたりすれば、である。そのときは、イヴァン3世にはヌル=デウレットの後押しをしてクリミヤの汗に返り咲かせるという手がある。そうなれば汗位争いの再燃であり、メングリ=ギレイは自身の権力を安定的に維持するためにもロシアとの同盟を尊重しなければならなかったのである。

そして、このたびは、ときとところをかえてメングリ=ギレイが大オルダに対して陰に陽に圧力をかけうる立場となった。大オルダの汗家の皇子であるムルタザ、サイイド=アフマドの兄弟を掌中にしたメングリ=ギレイは、彼らの弟であるシェイフ=アフマドを汗とする大オルダがクリミヤに対して敵対的な姿勢をとった際には、ムルタザないしサイイド=アフマドのどちらかを新汗の候補として押し立てるという手だてによってシェイフ=アフマドの汗権力にゆ

さぶりをかけることもできたであろう。

さらにすすんで、メングリ=ギレイが大オルダにかいらいの汗を擁立することまでできたならば、彼をつうじて大オルダの間接支配が可能となる。となれば、クリミヤを主、大オルダを従とするクリミヤ=大オルダ連合が南方の草原地帯の支配者となり、それが北方のロシア、リトアニアとむきあう三極構造が成立する展望も開けたであろう。

ただし、そうなるかどうかは、ムルタザ、サイド=アフマドがメングリ=ギレイの思惑通りにうごく存在、操り人形となるかどうかしだいであった。すべては彼らとメングリ=ギレイの関係にかかっていたのである。

2

アフメトの遺児であったムルタザ、サイド=アフマドの兄弟がクリミヤのメングリ=ギレイ汗のもとに身を寄せること数年、1485年になって彼らは動いた。メングリ=ギレイのもとをのがれて逃亡したのである。ただちにあとを追ったメングリ=ギレイによってムルタザは捕えられたが、サイド=アフマドは首尾よく逃げおおせ、ともに逃亡したマンギート族のティムールの支援を得て、汗となった¹³⁾。

かくして、ムルタザ、サイド=アフマドの兄弟を擁して大オルダに影響力を及ぼそうとするメングリ=ギレイのもくろみは水泡に帰すこととなった。それどころか、反対に、事態は大オルダがクリミヤ汗の危険な敵となる方向へとすすんでいく。大オルダとクリミヤ汗国の全面的な抗争である。サイド=アフマドは、自分がのがれてきたクリミヤ汗国に対する侵攻へとふみきったのである。

サイド=アフマドは、自身のベクリヤリベクとなったティムールとともに、メングリ=ギレイのすきをつけてクリミヤを急襲し、囚われの身であったムルタザを解放した。メングリ=ギレイが立てこもる首都こそ落とせなかったもののクリミヤ汗国領の大半を占領したサイド=アフマドらは、余勢をかって、

さらにクリミヤ半島の南部にあったオスマン帝国の支配地域にまで兵をすすめようとしたが、スルタンの援軍が派遣されてくるとの報におどらされて半島から撤退した。

このクリミヤ侵攻を皮切りに、大オルダとクリミヤ汗国は、はげしい闘争を繰り広げることとなる。1480年の「ウグラの対陣」に際しては、ロシア=クリミヤ同盟と大オルダ=リトアニア同盟の対峙のうち、大オルダのロシアへの遠征を主軸として事態が展開したが、1480年代半ば以降は、クリミヤ半島に侵攻しようとする大オルダとこれを迎え撃つクリミヤ汗国との戦いが前景に出てくるようになったのである¹⁴⁾。

クリミヤと結ぶイヴァン3世のロシアもまた、大オルダとの戦いに積極的に参画した¹⁵⁾。それとならんで、イヴァン3世が対外関係において力を入れたのが、西方のリトアニアとの対決である。イヴァン3世は、すでに「ウグラの対陣」までに、モスクワと双璧をなす中世ロシアの雄であった北方の都市国家ノブゴロドを併合するなど北東ロシアの統一をほぼはたしておえていた。これに対し、1480年代からは、イヴァンはそれまで積極策をひかえていたリトアニア領への進出に力を傾注していく。

リトアニアの勢力拡大にともない、その支配下におかれるようになっていたロシア西部・南西部の諸侯領をモスクワの傘下におさめるべく1487～94年、1500～03年にかけてリトアニアと戦って勝利したイヴァン3世は、かつてのキエフ・ルーシ領の大部分を勢力下におくようになった¹⁶⁾。これによってイヴァンは、名実ともに「全ルーシの君主（ゴスダーリ）」¹⁷⁾ という呼称にふさわしい存在となった。

一方、クリミヤ汗国においても、しれつな汗位争いの末、オスマン朝の支援を得て君主の地位を確保したメングリ=ギレイが、スルタンを宗主として戴くという制限はあるものの、長期にわたってクリミヤ汗として君臨し、安定した支配体制を固めていった。

そうしたなか、大オルダにおいても、アフメト亡き後の権力構造の再編がす

すんだ。サイド=アフマドによってクリミヤ汗による囚われの身から解放されたムルタザは、サイド=アフマドとならんで汗の地位につき共同統治者となった。かくして大オルダの内部においては、複雑な多頭支配の状況が生じた。すでに汗となっていたシェイフ=アフマドに対し、その兄のサイド=アフマドとムルタザが共同統治の汗となったのであるから。とはいえ、あきらかに優位であったのは、サイド=アフマド、ムルタザたちの側であった。彼らの父親であったアフメトのもとでベクリヤリバクをつとめていたティムールがサイド=アフマドのもとで同職についていたのにくわえ、部衆に顕示して自分たちへの支持を集めるべき武威の点でも、クリミヤ汗国への侵攻という実績をあげていたのであるから。

アフメトの3人の遺児たちが支配者の地位を分かち合うという大オルダの権力構造はその後、ゆるやかに変化する。はじめ手を結んでいたムルタザ、サイド=アフマドの兄弟のうちムルタザが失策により権威を失墜するとサイド=アフマドは、ムルタザをみかぎってかわりにシェイフ=アフマドをパートナーとするようになり、サイド=アフマド、シェイフ=アフマドの二人が、ともに汗として共同統治を行うようになった。

そうしたなか、アフメトの時代からの重鎮であったティムールが死亡すると、要職であるベクリヤリバクにも代替わりがおこった。ティムールの甥であったジャンクヴァトがサイド=アフマドのもとでベクリヤリバクをつとめるようになった一方、ジャンクヴァトの兄弟のハジケがシェイフ=アフマドのベクリヤリバクとなったのである¹⁸⁾。

対外関係の面からすると、大オルダの支配者にとって、西方のクリミヤが主たる敵であったのはもちろんであるが、ヴォルガ川の東方に群居する諸勢力への配慮もおろそかにはできなかった。何といても、1480年代以降の大オルダの混迷と苦境は、サイド=アフマド、シェイフ=アフマドらの父のアフメト汗が東方のチュメニの汗イバクやマンギート族の首長らに急襲され殺害されたのを契機とするのであるから。

問題は、この惨事がなぜ起こったかである。イバクらにアフメト襲撃を決意させた背景の一つとして指摘されるのが、アフメトによるめざましい勢力拡張の動きである。1470年代後半にアフメトはクリミヤ汗国の汗位争いに介入し、一時はクリミヤを自身の支配下におきかけた。こうした対外面におけるアフメトの活動の成果が、東方勢力につきは自分たちがアフメトの野心の対象になるのではという不安の念を起こさせたとされる¹⁹⁾。

ここからすると、アフメト亡き後に遺児たちによって権力が分有され、強力な汗による支配が樹立されない大オルダの状況は、東方勢力にとってはさほど深刻な危惧の念を起こさせないものであった。となれば、大オルダと東方勢力とが結ぶ余地も生まれてくる。実際、シェイフ=アフマドは強力な遊牧勢力であったノガイ・タートルとの連携をめざし、1493年にノガイの有力な首長であったムーサ²⁰⁾の娘と政略結婚をおこなった²¹⁾。

しかし、この結婚は大オルダの内部に反発を引き起こす誘因ともなった。ノガイの首長であるムーサがシェイフ=アフマド汗の岳父として強い影響力をふるうようになれば、大オルダのノガイへの従属につながりかねないと危惧した大オルダの有力者たちは、シェイフ=アフマドを汗位から追って、かわりにムルタザをサイド=アフマドの共同汗として返り咲かせたのである。ただし、これも長くはつづかず、ほどなくムルタザは汗位を失い、サイド=アフマド、シェイフ=アフマドの二人汗の体制が復活した。

このように、アフメト亡き後の大オルダでは、ムルタザ、サイド=アフマド、シェイフ=アフマドの3人の兄弟の権力をめぐるトライアングルが見られた。彼らのうち、最終的に優位者と見られたのはシェイフ=アフマドであり、後述するように、彼が1502年にメングリ=ギレイに敗れたのもって大オルダの命脈が尽きたとみなされるのであるが、そのシェイフ=アフマドの汗の地位とて盤石というわけではなかった。

大オルダの汗位をめぐる兄弟間のいざこざのなかで狂言回しの役を演じたのは、ムルタザである。ポチュカエフから軍事指導者としても為政者としてもす

ぐれていたわけではないが、父のアフメトから策謀癖をうけついでいたと評される²²⁾ムルタザは、一度汗位を失ったのちも機を見ては、上述のエピソードのようにシェイフ=アフマドから汗位を取りもどしたが、これを安定的に保つことはできず、衆望のなさから汗位を失った。

一方、ほぼ一貫して汗位にとどまったサイイド=アフマドは、共同の汗がシェイフ=アフマドであれムルタザであれ、2番手の支配者としてその地位を保ったのである。3人のうち誰かが傑出した支配者として君臨するのではなく、パートナーを替えながらの二人支配がつづくという状態であり中央集権と言うには程遠い体制であった²³⁾。アフメト亡き後の大オルダが、周辺諸国からは、単一の勢力というよりも「アフメトの息子たち」とみなされたというのも故なしとしないのである。

3

1480年代後半に始まる大オルダとクリミヤ汗国の抗争は、前者の攻勢を基調としていた。サイイド=アフマドとシェイフ=アフマドの両汗は、1490年にもメングリ=ギレイのすきをうかがってクリミヤ半島に侵攻、汗国内を寇掠してまわったうえ引き上げた²⁴⁾。

黒海につきだしたクリミヤ半島と本土のウクライナ南部をつなぐ通路であるペレコプ地峡は、東西にもっとも狭い場所で8キロメートルと狭隘な陸路であった。こうした地理的な特徴から、クリミヤ半島は、侵入を阻む側に有利な「固い木の実」と比喻されている。この天然の要害であったクリミヤ半島を本拠地とするクリミヤ汗国の征服は容易ではなかった。くわえて半島の南部はクリミヤ汗国の宗主国であるオスマン帝国の領土であり、クリミヤ汗は危機に臨んでは、ここからの支援を受けることができた。

さらに、メングリ=ギレイは北方の同盟者であるロシアのイヴァン3世からの援軍も期待できた。そのさい、イヴァン3世が、対大オルダ戦役においてクリミヤ汗と共闘するためにさしむけた兵力の主力をなしたのが、ロシアの勢力

下にあったタタール人の部隊であった。

その一つが、タタール人の皇子を君主としてロシアの領内に設けられたカシモフ汗国²⁵⁾のタタール人たちである。イヴァン3世の父ヴァシーリー2世の時代に設立されたカシモフ汗国は、もともとカザン汗国の皇子カシムを初代君主として建てられたが、カシムの家系が1486年に断絶した後は、もとのクリミヤ汗でメングリ=ギレイの兄であったヌル=デウレットがあらたな君主となっていた。イヴァン3世の命をうけたヌル=デウレットは、1487年より毎年のように弟のクリミヤ汗メングリ=ギレイと連携しながら大オルダとの戦いに従事するようになる。その後、1490年以降、ヌル=デウレットにかわって息子のサティルガンがカシモフ汗国のタタール人をひきいて叔父のメングリ=ギレイとともに大オルダと戦った²⁶⁾。

さらに、イヴァン3世はカザン汗国のタタール勢も大オルダとの戦いに動員した。1487年にカザン汗国の首都であったカザンを占領したロシアは、当時のカザン汗であったアリー（アレガム）にかえて、その異母弟でロシア国内のカシーラを扶持として得ていたムハメッド=エミンを汗位につけた。すなわち、ロシアの操り人形というべきかいらいの汗の誕生である。以降、カザン汗国のタタール人たちは、ムハメッド=エミン汗のもと大オルダとの戦いにくわるようになった。

これら同盟勢力と協力して大オルダを南北から挟撃する体制をととのえる一方で、メングリ=ギレイは、大オルダの西方への自由な移動を阻もうとした。大オルダの本拠があったヴォルガ川の下流域から草原地帯をとおって西方に向かうと大河ドニエプルにつきあたる。ウクライナを貫流して流れるドニエプル川は、クリミヤ半島の北で黒海へと注いでいる。メングリ=ギレイは、ドニエプル川方面に大オルダのタタール人が移動してくるのをさまたげるべく、ドニエプル川にそって一連の要塞を築き、その守備力としてオスマン朝の砲兵を配置したのである。

メングリ=ギレイの大オルダに対するこうした施策がものをいったのは、

1500年になってのことである。この年、ヴォルガ川流域を厳しい旱魃がおそい、飢餓が大オルダのタタール人たちを苦しめた。このため、シェイフ=アフマドは、より地味の豊かな地を目指すべく部衆をひきいて西へ向かった。その一行の前に立ちはだかったのが、メングリ=ギレイが築いた要塞群である。このため、シェイフ=アフマドはドニエプル川方面に居留するのを認めてくれるようオスマン朝の当局者にも願ったが、スルタンの宗主下にあるクリミヤ汗の肩を持ったオスマン朝に聞き入れられなかった。かくして窮地におちいったシェイフ=アフマドの部衆のなかには、クリミヤにのがれてメングリ=ギレイの配下に入るものもでてくるようになった²⁷⁾。

シェイフ=アフマドは、1500年から01年の冬にかけてクリミヤとの対決を決意し、一族のものたちにも協力を呼びかけた。呼びかけを受けたなかには汗位をめぐる因縁の相手であったムルタザまでいたが、一族のものたちの反応は、はかばかしいものではなかった。唯一、シェイフ=アフマドに合力したのが、共同汗であったサイド=アフマドであったが、両汗の配下のものたちのあいだで生じたトラブルを機に兄弟の関係も決裂、サイド=アフマドはシェイフ=アフマドのもとを去った²⁸⁾。

かくして、見通しが明るいとはとうてい言い難い状況におちいったシェイフ=アフマドは、草原地帯を移動しつつ、なんとか事態の打開をはかるべく行く先々に侵攻する気配を見せたため周辺諸国の脅威となった。こうしたなか、運命はシェイフ=アフマドにとってさらに厳しさの度合いをましていく。1501年から翌年にかけて旱魃と飢餓がつづいたうえ、凍てつく冬がシェイフ=アフマドの一行を苦しめた。窮乏に耐えかねたシェイフ=アフマドの部衆のなかには、クリミヤ汗のもとへ逃れるものが後を絶たず、そのなかにはシェイフ=アフマドの妃の一人もいるというありさまであった²⁹⁾。

シェイフ=アフマド陣営の苦境を見たクリミヤのメングリ=ギレイは、大オルダとの最終的な対決に臨む機が熟したと判断し、1502年5月タタール騎兵をひきつけて出撃した。対するシェイフ=アフマドの側は、ベクリヤリバクをつ

とめていたタヴァクル（ティムールの息子）までが、汗のもとを去り、2万人のタタール勢をともなうのみであった。6月15日頃、メングリ=ギレイのクリミヤ軍は、ドニエプル川にそそぐスーラ川のほとりでシェイフ=アフマドと戦い、打ち破った³⁰⁾。

シェイフ=アフマドに対する勝利によって事実上大オルダを壊滅においこんだメングリ=ギレイは、錦上に花を添えるべく、ヴォルガ河畔の都市サライにむかった。キプチャク汗国の伝統的な首都であり、ひきつづき大オルダの都ともなっていたサライを占領・寇掠するというシンボリックな行為によりメングリ=ギレイは、大オルダに対して決定的な勝利をおさめたことを広く世上に知らしめたのである。勝利者となったメングリ=ギレイは、かつて大オルダの支配者の配下にあったタタール人の多くを吸収、これによってクリミヤ汗国の勢力を大きく拡大させた³¹⁾。

一方、敗れたシェイフ=アフマドは、300騎に足らぬタタール勢とともに落ちのびた。その後、このかつての大オルダの汗は、再興を夢見て諸方をめぐりあるき1528年に死亡することとなる³²⁾。

また、それ以外の大オルダの汗家のメンバーたちも流浪の身となり、周辺諸国へと散っていった。彼らとその子孫のなかには、ロシア領内に設けられたタタール人勢力であるカシモフ汗国の君主となり、さらにロシアの手でカザン汗国の汗の座にすえられたものもいた³³⁾。タタール世界の貴種であった大オルダの汗の血縁者たちは、寄寓した先でそれなりの利用価値を認められ、何がしかの役割を与えられることもあったのである。とはいえ、どのような待遇を受けるかは、あくまで先方の都合しだいであった。強大な独立勢力の支配層であった彼らの命運は、いまや他者の手にゆだねられることとなったのである。

おわりに

かつて強勢を誇ったキプチャク汗国は14世紀より解体・分権化の道をたどり15世紀には大オルダ、カザン汗国、クリミヤ汗国、ノガイ・オルダなどの一群

のタタール人諸勢力が並び立つ状況となった。互いに協力あるいは競合する関係にあったこれらのなかで、他にぬきんでた筆頭者の地位についてキプチャク汗国の後継者となるべくあらそったのが、大オルダとクリミヤ汗国であり、ヴァシャーリは、1440年代から1500年代にかけての両者の関係を「覇権をめぐる闘争」と性格付けている³⁴⁾。

大オルダとクリミヤ汗国の敵対は、1440年代のハジー=ギレイによるクリミヤ汗国の建国以来、60年におよんだ。新興のクリミヤ汗国を強化して大オルダと対抗しようとしたハジー=ギレイは、タタール人の有力家門をクリミヤに移住させるべく積極的な勧誘策をとった。これに応え、1453年から66年のあいだにシリン、バーリン、コンギユラトなどの有力家門を含むタタール人たちがクリミヤに移りきたが、フィッシャーは、この移住がクリミヤ汗国の強化をもたらした一方で、内部抗争の火種ともなったと指摘する。キプチャク汗国の伝統的な有力氏族の首長たちは、独立不羈の風が強く、かならずしも汗の意向に唯々諾々としたがおうとせず、それがためにクリミヤの宿痼といべき内訌が頻発する原因となった³⁵⁾。

クリミヤ汗国の内部抗争のなかでも、初代の汗ハジー=ギレイが1466年に死亡した後の後継の汗位をめぐる争いはとりわけ深刻であり、ハジー=ギレイの遺児のヌル=デウレットとその弟のメングリ=ギレイを軸とする争いは、1478年にオスマン朝の支援を受けたメングリ=ギレイが汗の地位を確保するまでつづいた。

この争いに乗じてクリミヤへの影響力を強めようとしたのが、大オルダのアフメト汗である。汗位争いに介入したアフメトは、近親者をかいらいの汗の座にすえるなどしてクリミヤ汗国を自身の勢力下におこうとした。自然、メングリ=ギレイにとっては、大オルダは不倶戴天の敵とならざるをえない。この大オルダとの敵対においてメングリ=ギレイの同盟者となったのがイヴァン3世のロシアであった。「ウグラの対陣」において功を奏したモスクワとクリミヤの同盟はその後も維持された。この同盟関係の基盤の上に立ってイヴァン3世

はクリミヤとともに大オルダとの抗争をすすめたが、その一方で、イヴァンがあらたに攻勢の矛先をむけるようになったのが、リトアニアである。主力を対リトアニア戦に傾注するようになったロシアは、リトアニア大公の支配の下にあった西部・南西部のロシア諸侯領の多くを奪回、かつてのキエフ・ルーシの大部分を統一するにいたる。

その一方で、大オルダを相手どって遊牧勢力同士の激しい戦いをくりひろげたのが、クリミヤ汗国である。メングリ＝ギレイは「アフメトの息子たち」との戦いで、時にはクリミヤ半島内に攻め込まれるような苦境に追い込まれることもあったが、ロシアやオスマン朝の支援をうけてそれをしのぎ切った。逆に、メングリ＝ギレイは16世紀初めにはついに大オルダの汗シェイフ＝アフマドに対して決定的な勝利をおさめ、キプチャク汗国解体後に成立したタタール人諸勢力の覇権をにぎったのである。

かくして、かつてのキプチャク汗国の勢力下にあった広大な地域のうち、北方のスラブ人世界ではロシアが、南方の草原世界ではクリミヤ汗国がそれぞれ支配者となった。この後、16世紀前半より両者のあいだに闘争がはじまり、それは18世紀にロシアがクリミヤを併合するまでつづくことになる³⁶⁾。

注

- 1) 大オルダについては、V. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. Очерк истории. Тула, 2010, И. М. Миргалеев. История Большой Орды: проблемы изучения // Средневековые тюрко-татарские государства. Сборник статей. Выпуск 2. — Казань: Институт истории им. Ш. Марджани АН РТ, 2010 参照。
- 2) 「ウグラの対陣」については、Н. С. Борисов. Иван III. М., 2000, с. 430-45 参照。
- 3) 「タタールのくびき」の終焉にかんしては、В. В. Каргалов. Конец ордынского ига. М., 2011 参照。
- 4) クリミヤ汗国については、A. Fisher, *The Crimean Tatars*, Hoover Institution Press, 1978, Brian Glyn Williams, *The Crimean Tatars The Diaspora Experience and the Forging of a Nation*, Brill, 2001 参照。また、同盟関係にあったイヴァン3世時代のロシアとクリミヤ汗国のあいだの外交のありようについては、Robert M. Croskey. The Diplomatic Forms of Ivan III's Relationship with the Crimean Khan, *Slavic Review*, vol.

- 43, no. 2, 1984; Muscovite Diplomatic Practice in the Reign of Ivan III, 1987 参照。
- 5) イスハコフは、大オルダの滅亡を、一挙に生じたのではなく、1502年から04年にかけての、場合によっては1515年までつづいたプロセスとしてとらえている(Д. М. Исхаков. Тюрко-татарские государства XV-XVI вв. Казань, 2009. с. 129)。
 - 6) マンギートは、14世紀末から15世紀のはじめにかけてキプチャク汗国の事実上の支配者であったエディゲイの出身の部族であり、エディゲイの子孫たちによってマンギートを中核とする遊牧勢力のノガイ・オルダが形成された。
 - 7) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 76。一方、ポチェカエフは、アフメトの息子は9人であったとしている(Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. Биографии ханов и правителей Золотой Орды. СПб., 2012. с. 266)。
 - 8) ベクリヤリベクは、各遊牧集団の首長であったベクたちのなかの筆頭の地位にある存在であり、チンギス汗の血統者でないために汗にこそなれなかったものの、汗の補佐役たるにとどまらず、実質的に汗国の政務全般を宰領する場合も多かった。
 - 9) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 266。
 - 10) Там же. с. 267。
 - 11) ロシアにおけるヌル=デウレットについては、拙稿「クリミヤ汗ヌル=デウレットとロシア」関西大学『文学論集』第68巻第2号, 2018年 参照。
 - 12) ヌルサルタンは、大オルダのベクリヤリベクであったマンギート族のティムールの娘であった。カザン汗イブラヒムと死別した後、クリミヤ汗のメングリ=ギレイに嫁した彼女は、クリミヤ汗の妃にしてカザン汗(およびその候補)の母として、ロシアおよびタタール諸勢力がおりなす当時の国際関係におけるキーパーソンの一人となる。
 - 13) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 267。
 - 14) 1486年から91年にかけての、ロシアが支援するクリミヤ汗国と大オルダとのあいだの争いについては、К. Базилевич. Внешняя политика русского централизованного государства. Вторая половина XV в. М., 1952. с. 208-17 参照。
 - 15) カルガーロフは「ウグラの対陣」以前とそれ以降のイヴァン3世の大オルダに対する政策を比較し、従来の戦略的防衛から積極的攻勢に転じたと性格づけている(В. В. Каргалов. Конец ордынского ига. с. 115)。
 - 16) イヴァン3世時代のロシアの対リトアニア政策と西方への拡大については、Н. С. Борисов. Иван III. М., 2000. с. 459-500, К. Базилевич. Внешняя политика русского централизованного государства. с. 282-337 参照。
 - 17) イヴァン3世の「全ルーシの君主」としての歴史的な性格については、Ю. Г. Алексеев. Государь всея Руси. Новосибирск. 1991 参照。
 - 18) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 76。
 - 19) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 264。

- 20) トレパヴロフは、ノガイの歴史のなかで、ムーサを独立したマンギートのユルト、すなわちノガイ・オルダの真の創設者と位置付けている（В. В. Трепавлов. Орда самовольная: кочевая империя ногаев XV-XVII вв. М., 2014. с. 29）。
- 21) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 80, Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 270.
- 22) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 268.
- 23) シェイフ=アフマドらの父であったアフメトにしても、兄のマフムードと大オルダの君主権を分有しており、初期にはマフムードの方が上長の立場にあった（Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 253-54）。ミルガレエフは、こうした近親者間の共同統治の問題を大オルダ史研究における論点の一つとしてあげている（И. М. Миргалеев. История Большой Орды. с. 103）。
- 24) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 268-69.
- 25) カシモフ汗国については、Б. Р. Рахимзянов, Касимовское ханство: 1445-1552: очерки истории. Казань. 2009 参照。
- 26) ヌル=デウレット、サティルガン父子の対大オルダ戦におけるクリミヤとの共闘にかんしては、拙稿「クリミヤ汗ヌル=デウレットとロシア」参照。
- 27) Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 274.
- 28) Там же.
- 29) Там же. с. 276.
- 30) В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 91.
- 31) イスハコフは、16世紀初めのクリミヤのタタール人口を約30万人と見積もったうえで、大オルダに対する勝利の後、これが一時的に50-60万人にまで増加した可能性があるとしている（Д. М. Исхаков. Тюрко-татарские государства XV-XVI вв. с. 41）。
- 32) メングリ=ギレイに敗れた後のシェイフ=アフマドについては、Р. Ю. Почекаев. Цари ордынские. с. 276-81, В. Трепавлов. Большая Орда Тахт эли. с. 91-98.
- 33) ロシアにおもむいた大オルダの汗家のメンバーたちがたどった運命については、А. Беляков. Чингисиды в России XV-XVII веков: просопографическое исследование. Рязань. 2011. с. 60-67 参照。
- 34) Иштван Вашари. Крымское ханство и Большая Орда (1440-1500-е годы). Борьба за первенство // Средневековые тюрко-татарские государства. Сборник статей. Выпуск 5. —Казань: Институт истории им. Ш. Марджани АН РТ, 2013.
- 35) A. Fisher, *The Crimean Tatars*, pp. 5-7.
- 36) 16世紀以降のロシアと草原世界の諸勢力との関係については、Michael Khodarkovsky, *Russia's steppe frontier: the making of a colonial empire, 1500-1800*, Indiana University Press, 2002 参照。